狂人なおもて往生をとぐ

——昔、僕達は愛した

清水邦夫
kunioSHIMIZU

新水社

なおもて往生をとぐ

——昔、僕達は愛した

清水邦夫
kunioSHIMIZU

新水社

狂人なおもて往生をとぐ

定　価　1,000円

1987年3月25日　第1刷発行

著　者　清水邦夫

発行者　村上克江

発行所　新 水 社

〒102 東京都千代田区飯田橋1-6-8　三友ビル302

電話 03(261)8794

印刷所　三報社印刷株式会社

製本所　㈲栄久堂

© 1987 Kunio Shimizu, Printed in Japan

ISBN 4-915165-11-6 C-0074

落丁・乱丁本はおとりかえします。

目次

狂人なおもて往生をとぐ　1
後記　131

狂人なおもて往生をとぐ

——昔　僕達は愛した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人

善一郎　五十六歳

出　三十歳

敬二　二十歳

はな　五十一歳

愛子　二十六歳

西川めぐめ　二十歳

第一幕

舞台――部屋。

椅子、長椅子、調度品など。（ありふれた椅子や調度品をしつらえてもいいのだが、この際思い切って省略し、床に程よい〈穴〉三つだけというのはどうだろう。ついでに、左右二つの出入口も〈穴〉。出入口は便宜上名称があった方がいいので、左の方をキ穴、右の方をク穴と呼ぼうか。むろんリアリスティックな装置にしてもかまわない。）

夕闇が濃い。和服姿の善一郎が柱の照明をつけ替えている。ようやく作業が終ったようだ。善一郎、スイッチの紐を引っ張る。

と、部屋の中にけばけばしい俗悪なピンクの光彩が満ちる。一瞬、善一郎は呆けたように瞶めるが、やがてニヤニヤ笑い出す。

二、三度スイッチをつけたり消したりしているうちに、笑いは哄笑に高まり、体をよじったあまり着流しの懐からウイスキーのポケット瓶が転げ落ちる。

ク穴よりはな登場。

はな　（悲鳴）ああ……とうとうつけたのね。

善一郎　案外悪くないだろう。薔薇色の部屋……いっそピンクドールなんてネオンもつけようか、遣手ばあさん。

はな　どうぞ、お好きなように。

善一郎　あなたの頬はまるで少女だ。わたし達が初めて知り染めた頃のように……タイムマシン。費用はたった六千五百五十円也。

はな　酔ってらっしゃるのね。

善一郎　そう、はなはだつらき作業のために、（慌てて）肉体的につらいという意味ですよ、ここ数十年本をひもとく以外、これといった労働をしなかったからね。ところが近頃では何に見える？

はな　トルコ風呂のボイラーマン？

善一郎　ほんとに楽しそう。

善一郎　あなただって御同様。楽しみが不足だなんて言わせませんよ。恍惚と涙を流す瞬間が日に幾たびおとずれる事か……

二人、一瞬瞶め合う。

はな　気狂い！

善一郎　分裂症！

はな　ああ……

はな、体を震わせ顔を覆って退場。
善一郎、白けた表情でスイッチを消す。
突然、目覚まし時計が鳴り響く。
その目覚まし時計をかかえて、出がク穴より登場。

出　時間だ！　いよいよ決行の時が来たぞ！

善一郎　（驚かない）何をやらかすつもりかね。

出　あの女はどこだ。

善一郎　（顔をしゃくり）呼ぼうか。

出　冗談じゃない。

善一郎　用があるんだろう。

出　おさらばだ。

善一郎　なに？

出　（苛々して）あの女のいないうちにおさらばするんだ。グッド・バイ。こんな生活なんて糞食らえ。

善一郎　これで七回目だ。

出　七回目？　七回目は六回目の次だな。

善一郎　多分ね。

出　コンディションは上々だ、パトカーに追いかけられても捆まらないぞ。（風呂敷包に目覚まし時計をしまいながら）見ろよ、俺の荷物、今度はどこに隠してあったと思う？　冷蔵庫の中。キャベツと白菜の間。とうとう隠し場所がなくなったらしい。あさはかな女だ。ははは……煙草くれよ。

善一郎　（煙草を渡し火をつけてやる）ねえ、きみ、あんまり固苦しい事は言わないでもう少しいたら。何も働かないですむんだし、（気をそそるように）きみの望み通りほれ……

善一郎、走りよってスイッチの紐を引く。
漲るピンクの光彩。

善一郎　気に入ったろう。万事きみの注文通りじゃないか。

出　（冷然と）柱をみんなタイルにした方がいい。

善一郎　柱をタイルに？

出　タイルだ。勉強不足。もっとトルコ風呂やヌードスタジオを見学しろよ。それらしく、もっとそれらしく。柱をタイルにするか、タイルにすれば考え直してもいい。俺にいて欲しいんだろう。俺を嫌いながら、俺の存在を必要としている。ゴタゴタをさばくのが旨いからな。気に食わんね。あんたの服装。あんたは唯の客。なんだ此処の主みたいな恰好をして。

善一郎　和服がお気に召さなかったらしいね。

出　帯。帯だよ。帯を引きずっているなんていかにも生活的じゃないか。客なら客らしくしろ。

善一郎　（苦笑）悪かった。つい馴れ過ぎたかも知れん。（ウイスキーを差し出し）呑むかね。

出　客からは一切物をもらわない事にしている。淫靡な関係を強制するな。

善一郎　なるほど、……しかしわれわれはもう少し親しくなっても構わないと思うがね。きみは客、客と言うけれど、年齢（とし）かっこうから言っても、きみの父親ぐらいだし。

出　だからどうだと言うんだ。

善一郎　（ウイスキーにむせる）……例えば、このわたしに父親のような親愛の情を示してくれてもいいと思うがね。

出　（ふき出す）……

善一郎　遊びだよ、遊び、悪くないだろう、このアイデア。

出　次には、あの女をおふくろだと思えだろう、いい加減にしろ。

善一郎　いたちごっこさ、きみの脱出さわぎとね。（親しみをこめて）きみ程の若さなら何も五十女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のヒモになること、ないじゃないか。

出　余計なお世話だ。近頃あの女と寝ないんで気をまわしているんだろう。

善一郎　まあね。

出　あんたは毎晩か、よく金が続くな、大学の守衛のくせに。

善一郎　教授だよ、これでもね、もっとも数年で定年退職、あとは自由解放の身。

出　くたばるのか。

善一郎　自由解放。

出　だから……

善一郎　わかった、同じようなものさ。

出　淫売宿通いも程々にしろ。

出、立ち上ってスイッチの紐を引っ張り、つけたり消したり。

善一郎　悪くないだろう。

出　だめだ。柱をタイルだ。こういう照明には、なにかきらっと光るものがなくちゃ。（部屋を見廻し）何も光るものがない。なんでもいい、きらっと光るもの、眼が眩しくなるもの、正視にたえないもの……例えば大口で笑う女の金歯のようなもの……くだらん、やっぱりこの家を出るべき

だ。

善一郎　もう夜だし、今夜は、ま、話そうじゃないか。

出　よせったら。ま、話そうじゃないかと口癖のように言う奴とは話したくない。あの女がこないうちに行こう。会うと気がにぶる。優しすぎる。うんざりする程優しすぎる。あんたの事を反吐が出る程きらいだと言ってたぜ。

善一郎　そうかね。でも金を払えば優しくしてくれる女だ。

出　あの女の悪口はよせ。……愛している。俺は愛している。あれはまさしく娼婦だ。（首をふり）今のままでは互いに身の破滅だ。俺達の関係を美しい想い出に塗り込めなくては……そうだ、童謡の世界に。彼女は草の葉、俺は赤トンボ。

善一郎　わたしの世代なら、航空母艦と艦載機に例えるがね。

出　わたしなら、なんとかなんとかに例えるがね。反吐が出る。あの女の言う通りだ。まるで学校の先生そっくり。

善一郎　残念ながら、その先生。

出　う？

善一郎　ここじゃ唯の客さ。

出　なるほど。先生か。守衛じゃなくて教授。よし覚えておこう。あんたは学校の先生。

善一郎　こだわるね、ヤケに。ごくありふれた職業だろう。

出　いやいや。勇気のいる仕事だ。おそろしい程強靱な精神を要求される職業だ。なんたって若き魂の中へ敢然と踏み込んでいって、その世界観、価値観を自由に支配しようというのだからな。恥知らず。

善一郎　恥知らず？

出　そう、恥知らず。

善一郎　かも知れんね。うまく説明出来んが、案外わたしのモットーだったかも……なにしろ周囲には人格高潔にして後向きという人物が多いからね。

出　後向きでなければ前向き。

善一郎　それそれ。

出　あんたが。

善一郎　多分。

出　笑わせるな。

善一郎　いいでしょう。ここでは唯の客。

出　パパ……

善一郎、椅子からとび上る。

善一郎　なんて言った？　パパ？

出　そう呼んでるじゃないか。パパさん……あの女、客にはみんなそうだ。さあさあうす汚れたパパめ、排泄が終ったらとっとと失せやがれ！

善一郎　がっかりしたね。てっきり父親への親愛の情をこめて呼んでくれたのかと思ったがね。

出　ばかばかしい、そんなワイセツな遊びに付き合っていられるか。

善一郎　ワイセツな遊びか、なるほどねェ。

ク穴より愛子登場。
手にポピーの造花とハンドバッグを持っている。

愛子　あ、パパ……

出　（ゲラゲラ笑う）パパさんと言え、パパさん……

愛子　いいわよ、パパさん。

善一郎　今夜は早いんだね。

出　約束はどうした。

愛子　約束？　なにか買物をたのまれたかしら。

出　ひどいよ、ひどい、昨夜かぎり此処へはもう通ってこないと約束したろ。畜生、こうなったらゲ

バルトをもって阻止するぞ。

愛子　（するりと身を翻し）きれいな花でしょ、傷つけないでね。

善一郎　見事なフットワーク。

愛子　造花にも花のプライドはあるものよ。

出　くたばれ。

愛子　きれいでしょう、もう三千本位造ったかしら。

出　男とは何人寝た。三千人か、三千人とは二千九百……

愛子　二千人とは千九百九十九人の次。

出　こんな破廉恥な商売はもうやめろ。昨夜一晩じゅう、あの女と語り明かしたんだ。あの女、涙を流して頷いていた。

愛子　当てにはならないわ。

善一郎　そうとも、ママって女は、考えたくない時にはきまって涙を流す性分でね。きみだって知ってるだろ。

出　黙ってろって！（愛子に）なぜ、俺の忠告を無視する。信用してないんだな。

愛子　あなた、わたしと一緒に逃げてくれる？

出　どこへ？

愛子　どこへでも。二人で蒸発。

出　くたばるのか。

愛子　うううん、生きるため。

善一郎　よしなさい。彼にはママという女がいるじゃないか。

愛子　簡単よ。ママを捨てればいい。

出　ママを捨てろだって？　捨て猫みたいにか。

善一郎　無理だよ。彼には出来ない相談だ。

愛子　そんなにママを愛しているの。

出　畜生、俺を見くびってやがる。あの女から離れられないと思ってるな。

善一郎　そこがきみのいい所さ。気は優しくて力持ち。

愛子　いいのよ、あなたがママと切れなくたって構いやしない。（瞶めて）好きよ。……ゆっくり考えるわあなたの忠告、朝まで時間がたっぷりあるもの。

出　おい、待てよ……

愛子　きのう召されたタコ八が、弾丸にあたって名誉の戦死……

愛子、退場。

出　（呟く）きのう召されたタコ八が、弾丸にあたって名誉の戦死。タコの遺骨はいつ帰る……（続き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com